序　章

1

電話のベルが鳴っている。

その音で眠りから半分覚めた松永は、ベッドから手をのばして受話器をとった。

「はい――わかりました。ありがとう」

ゆうべ寝る前にモーニングコールを頼んでおいたのだ。

外しておいた腕時計を手にとって見ると、五時十分すぎ。五時四十分には玄関にタクシーがくる。この時間帯なら数分で東京駅に着くだろう。

厚いカーテンをあけると、もうひとつレースのカーテンがあって、それも勢いよく引くと、朝靄にかすむ皇居の森が眼下にひろがっていた。

空には雲ひとつなく、きょうも真夏日になりそうな気配だ。

――名古屋の天気は、どうだろうか。

松永は、バスルームの鏡にむかってヒゲを剃りながら、きょう七月九日、愛知県がんセンターで手術

の日を迎える友の身へ思いを馳せた。
密室状態の手術室で手術をするのに、その日の空模様など関係ないようだが、人によるとやはり雨が降っているよりは、快晴であるほうが手術に臨む心構えにも、なぜか張りがもてるのだという。
「なんとなく、楽天的な気持になれるんですね」
と、ある患者から聞いたことがある。
自分でも何回か手術を受けた経験のある松永には、そういう患者の微妙な心理が理解できた。
――もう、目を覚ましているだろうな、彼も。
松永とは三十年来、管鮑の交わりともいえる誼をつづけてきた名古屋大学医学部教授・高橋信次の胃の手術が、きょうの午前九時三十分から始まるのだ。
執刀は、愛知県がんセンター総長の今永一が自ら行う予定と聞いている。
その手術に立ち会うことを、松永は三日前に高橋本人から求められていた。

この一週間、松永藤雄の日程は多忙をきわめた。
七月一日が弘前大学の評議員会。二日が弘前大学附属病院の運営委員会（ちなみに松永は昭和三十四年から三十八年まで弘前大学医学部附属病院長だった）。そして七月三日、四日、五日は仙台で行われた医師国家試験審議会東北・北海道地区部会に出席。六日には仙台空港から開設されたばかりの全日空

名古屋便で、手術前の高橋信次を愛知県がんセンターの病室に見舞っている。

そのときに高橋から、三日後に行われる手術の立ち会いを頼まれたのだった。

「執刀をしてくださる今永先生には、わたしからお許しをいただきますので」

という友の頼みを、松永はもちろん快諾し、その日の午後三時の「ひかり」で東京に戻ってきた。七日に東京で日本学術会議の臨時総会が開かれるためだ。この年、松永は日本学術会議第七部（医学・歯学・薬学）のメンバーに選ばれている。

さらにきのう（八日）は、衆議院議員会館に宮城・青森県選出の代議士（長谷川峻、大石武一、田沢吉郎、竹内俊吉）を順々に訪ね、「弘前大学へのご助力をよろしく」という、陳情までしている。

このため、さすがに疲労が溜まりすぎたのか、議員会館のあと同行者から誘われた夜の食事も断わって、ゆうべは早めにホテルに戻り、バスにゆっくりとつかってベッドに入った松永である。

東京駅を午前六時に発った「ひかり」が、はやくも富士川の鉄橋を渡っている。

海側のいちばん窓際の席から松永は、後方にたちまち過ぎてゆく富士川の流れのあと、つづいて視界に現われた青やかな田園風景のパノラマに見入っていた。朝日がまぶしすぎるのでカーテンを半分だけ引いてある。

通路をはさんだ山側の座席では、外人客たちが賑やかに富士山を撮っている。

松永はさっきから、その端整な横顔を外人客たちのほうへ向けたまま身じろぎもせず、二十数年前、高橋信次とともに学究三昧の日々を送った遠い津軽の野づらを憶い出していた。

外人客たちの会話がしだいに遠のいてゆく。

――そういえば、あれも夏の盛りだったな。

松永の脳裏にたちまち夏草の強烈な熱(いき)れがよみがえってきた。

その茂るにまかせた夏草をかきわけるようにしてボストンバッグひとつをさげた白い開衿シャツと黒いズボンの高橋が、トレードマークの人懐っこい笑顔で現われたのだ。

松永には待ちに待っていた放射線科教授・高橋信次の着任だった。

その日から高橋は、松永内科のいわゆる合宿に入り山下正矩講師と三人の共同生活がはじまった。

敗戦までは歩兵第五連隊の将校官舎だった建物が、そのまま『青森医学専門学校』の附属病院になっており、外来も病室も教職員たちの宿舎もいっしょくたの雑居生活だった。

なにしろ敗戦の前年（昭和十九年）、軍医養成を目的とする国策によって創られた速成の医学校である。それが二期生を入れたとたん、戦争に負けて“軍医”など不要となってしまったが、とにもかくにも大日本帝国陸軍が雲散霧消したあとの老朽官舎で、医学生たちへの授業だけはつづけられていた。

なにもかもが応急手当の医学校だった。連隊長官舎の座敷が、そのまま外科の部屋として使われ、床

の間付きの部屋に手術台が置いてあったり、また、放射線科の部屋は共同炊事場だったところで、並んだかまどの横でレントゲンの撮影をしていた。

冬などはシベリヤから送り込まれてくる寒気がことのほか厳しい土地であったため、高橋が乾燥のため吊しておいたX線フィルムが、朝にはバリバリに凍って使いものにならない失敗もあったりした。

夏は夏で蒸し風呂のような草いきれが部屋中に充満するなかで、ステテコ一枚、上半身は裸の高橋教授が、実験装置を作るため大工仕事をしたり、頭から軍隊毛布をかぶり（つまり、それを暗室のかわりにして）X線透視に取り組んでいた姿も、忘れられない光景だ。

レントゲンの機械も、日本海軍から払い下げられたガラクタ同然のものを、着任早々の高橋自身が何日もかけ両腕を油まみれにして修理し、どうやら使用に耐えるようにしたシロモノだった。

「ぼくなどとちがって、高橋君は、どこまでも学究一筋だった」

と、松永はだれにでも高橋信次について語るとき、それこそ枕詞（まくらことば）のようにしていう。

「そのかわり、炊事当番などの家事労働は、手抜きが多かったね。男ばかりの共同生活だから、食後の片づけを順番に担当するんだが、高橋君の洗ったあとの茶碗には、いつも飯粒がこびりついていた。夕食時間になっても、彼が放射線科の部屋に閉じこもったまま戻って来ないので、かわりに当番をさせられたことがずいぶんとあったな。そもそも高橋君が、箒を使っている姿をいちども見たことがなかったね」

当時三十四歳の高橋は、そんな劣悪な環境と周囲の温かい理解の中で、彼の畢生の偉業となった『X線による回転撮影法の研究』の第一歩を踏み出したのだった。

その日から星霜はめぐって二十三年。

いま、その高橋信次に文字どおり刻々と、生死を賭けた手術の刻が迫っていた。

主治医の説明からも、また身内のだれからも、もちろん高橋自身からも、いっさい「がん」という言葉は聞かれなかったけれど、松永には、おそらく高橋信次の病名が、「胃がん」に間違いないという確たる予感があった。

三日前、空路名古屋入りして、短時間だったが高橋を病室に見舞ったとき、二人の会話は手術後の「ダンピング症候群」についてのレクチャーと、その質疑にほとんどが終始した。

「ダンピング症候群」とは、簡単にいえば胃の切除を受けた患者の食べたものがいきなり、短くなった胃を通り抜けて小腸へ墜落するために一種のショック症状（動悸が激しくなり、冷や汗が出るなど）を起すことをいう。これは、胃切除後の患者にときにみられる症候群のひとつだが、その予防方法について潰瘍で胃切除の経験がある松永がレクチャーし、高橋が熱心に質疑したのであった。

東北大学医学部の先輩後輩の仲でもある二人の会話は、たまたま病室に入って来た看護婦まで思わず笑いを誘われるほどの、和やかなものであったという。

そんな雰囲気のなかでふと一瞬、高橋が真顔になった。

「松永さん――もし、お体の都合がついたら、手術に立ち会っていただけませんか」

それは、たいへんに恐縮したいいかたではあったが、また、散歩のついでにハガキをポストに投函して来てほしい、という程度の、さりげない頼み方でもあった。

当日は東京から弘前へ帰る、いわゆる移動日にあたっていたが、友のためためらわず、その予定を一日遅らせることを、松永は瞬時に決断した。

時刻表どおり「ひかり」が名古屋駅についた。手術が始まるまであと一時間半ある。駅前からタクシーを拾えば、愛知県がんセンターまで三十分もあれば行ける。

松永は、小さな濃緑の旅行鞄ひとつの身軽ないでたちで、名古屋駅の中央コンコースを大股に抜けて広小路口へ出た。どこか駅近くのホテルのコーヒーラウンジにでも入って、朝食を摂っておかなければならない。

胃がんの手術なら、ふつう二時間前後はかかる。高橋信次の場合、おそらく早期のものであって、進行性のがんではないだろう。

――でも、午前中いっぱいはかかりそうだな。

松永はなが年、胃がんの手術に立ち会ってきた経験から、手術時間の目安をそう推測した。

松永には、

――たとえ胃がんであっても、門下生には錚々たる放射線診断医が目白押しの高橋君だから、万が一にも手遅れの進行がんなどということはないはずだ。

という楽観があった。

しかし、万々が一という危惧もないわけではなかった。それで松永が憶い出すのは七年前（昭和三十七年）、国立がんセンターの初代総長であった田宮猛雄が、久留勝病院長など側近のすすめで（胃かいようという名目で）開腹手術をしたときには、すでに絶望的な悪性進行がんに冒されていたという事例である。

それこそわが国最高最強のがん専門医をそろえた”がん撲滅の総本山“の総長が、手遅れの胃がんで亡くなってしまうこともあるという事実は重い。

また、たとえ悪性の進行がんでなくとも、麻酔下に起る不測の事態も考えられる。そのことでは、松永と高橋には共有するひとつの痛恨事があった。

それは、高橋信次を『青森医学専門学校』に放射線科教授として招いてくれた丸井清泰校長が、昭和二十八年、やはり胃がんの手術中に麻酔の事故により死亡したことだった。しかも、その手術には松永と高橋、そして二人の先輩で第二外科の槇哲夫教授も立ち会っていたのである。

「そのとき、手術台のいちばん近くで見ておったんですが、顔色がおかしいと気づきましてね。麻酔

下で丸井さんがちょっと体を動かして、それでもどした胃内のものがノドに詰まったんです。それで一時窒息状態になり、麻酔が覚めないまま翌日の午後に亡くなってしまいました」

ことし（平成五年）、八十三歳になった松永藤雄さんは、いまも名誉院長としてつとめている都立駒込病院の全景を眺望する、高層マンションの一室で当時の模様を語ってくださる。

もちろん、松永にとっても丸井校長の不慮の事故は、大きな衝撃だった。だが、それ以上に高橋信次にとって丸井校長の死は、父親の死にまさるとも劣らない悲しみであった。

高橋が青森に赴任したころ、いわゆる医専には、放射線科の講座が全国どこにも置かれていなかった。放射線科の講座があるのは、東大のほか数カ所の大学だけ。

そんな時代にみちのくの新設の医専が、わざわざ他の講座を犠牲にしてまで、放射線学の講座を設けたのは、丸井校長がいかに少壮気鋭の医学者である高橋信次に期待すること大であったか、その証左となろう。

それだけではない、高橋が外国向けに発表する論文の翻訳までも、丸井校長は欣然と引受けてくれたという。

その丸井清泰が、『青森医学専門学校』の校長から『弘前医科大学』の学長、そして『弘前大学』の医学部長兼学長へとすすみ、さらに第一回公選学長選挙へ出馬する直前、思わぬ事故に遭って死んでしまったのだ。

高橋信次にとって、これほど悔しい千載の恨事はなかった。

「ぼくに手術の立ち会いを求めたとき、高橋君はもちろん、ぼくだって丸井さんのことなど一言もいいませんでした。でも、あのときの事故の模様が一瞬、頭をかすめたこともたしかです。がんで死ぬのは仕方がない、といっちゃなんだけど、あきらめはつく。しかし、がんを治そうと手術している最中に、麻酔下の事故で死んではたまりませんよ」

――いま、彼を死なせるわけにはいかない。

それが松永の衷心からの思いだった。

高橋信次がライフワークとして取り組んでいる、『X線による回転撮影法の研究』を集大成するまでには、あと二十年、いや三十年はぜひ生きていてもらわなければならない。それなのにいま、

――がんぐらいで死なせてたまるか。

それが松永の偽らぬ気持だった。

「そうです、ほんとうにあのときは、そんな気持でした。青森時代からずっと、高橋君の研究ぶりを身近かで見てきましたからね。弘前の町の小さな鉄工所を借りて、夜なべ仕事で回転横断撮影装置などの模型を作ったときの苦労話も、くわしく聞いていましたし。その装置がついに完成して、タカハシ・トモグラフィという名で外国でも注目を浴び出したという、ちょうどその時期でしたから。胃がんなど

で死なせてたまるか、心の奥底からそう思いました。二十数年にわたる高橋君の研究がようやく報われはじめ、これから花も咲き、実も成る。それなのにいま、彼を死なせるわけにはいかない、そんな祈るような気持で手術に立ち会いました」

そうなのである。高橋信次の『X線による回転撮影法の研究』が、どれほど偉大なものであるか――まだ、この時期（昭和四十四年）知るものは、一部の医学放射線関係者をのぞいては、ほとんど日本国内にはいなかったといってもいい。

「だれが、いまから五十年も前、人体を生きたままで、その断面図が撮れる時代がくると予測していましたか。夢想だにできなかったのではないでしょうか。でも、一人だけいたんですね、それが高橋君だった。どうすれば人体の断面を、死体を輪切りにするのではなく、生体のまま患者になんの苦痛も与えず、撮影することができるだろうか、その方法はないか？　そのことを考えつづけてきた人間、それが高橋君だったのです」

と、その生涯を通じて高橋信次が兄事することを惜しまなかった松永藤雄さんはいう。

ここに『ＤＡＭＥ』（昭和五十九年九月号）という雑誌がある。その中にノンフィクション作家の山根一眞氏が書いた、高橋信次に関する記事が六ページにわたって載っている。

《世界で初めて人体の断面写真を撮り、ＣＴスキャナーの先駆者となった偉大な医学者》の見出し。

その文中には《高橋はすでに昭和二十四年、弘前大学で輪切り像の撮影に成功している。（略）骨の

きれいな断面写真もある。ＣＴにさきがけること二十数年前、こんな見事な写真が撮られていたことに息をのんだ》と書いてある。

二十世紀最大の医学発明といわれ、人類にはかりしれない福音をもたらし、いまや世界の医療界の寵児となっているＸ線ＣＴが出現したあと、「そういえばむかし、人体の輪切り像の撮影に成功した、日本人がいたじゃないか」と、ふり返って評価されたのが、高橋信次その人なのである。

ちなみにＣＴスキャナーが登場したのは、昭和四十七年。高橋の胃がん手術から三年後のことであった。

愛知県がんセンターの、表玄関車寄せでタクシーを降りた松永は、玄関へむかって歩き出したところで、出迎えるために走り出てきた松田忠義に気づいた。

「やあ」

と、松永から声をかける。

「お待ちしてました」

松田は礼儀正しくいって旅行鞄をとろうとしたが、松永は渡さず、先に立って玄関へ入っていった。

松田忠義は『青森医学専門学校』の一期生として、高橋教授の誕生と同時にその門下生となったのだ。いまは、豊橋市民病院の放射線科部長という激職にあったが、高橋の入院以来、連日のように豊橋から

師の病室まで通っていた。ちなみに後年、松田は都立駒込病院の副院長として松永院長を補佐した時期もあり、現在（平成五年）は、日本ハイパーサーミア（がん温熱療法）学会会長の重責にある。

「今永先生は？」

足早やにエレベーターへむかいながら松永は訊く。

「ほんのさっき、手術室に入られました」

「高橋君は？」

「まだ、病室だと思いますが」

「じゃあ、ちょっとだけ顔をみてこようか」

「そうですね、先生も安心なさると思います」

七階の病室には、高橋の妻（歌子）をはじめ、郷里の福島県二本松市から駆けつけた姉（ハマ）や弟（宏吉）、それに歌子の弟（忠治）や地元の福島医大をでて医師になったばかりの甥（哲之助）などの顔がそろっていた。

高橋は看護婦たちの手によって、すでにストレッチャー（移動用寝台）に移され、手術室に運ばれていくばかりになっている。

高橋の眼が松永をみとめた。

二人が互いに軽くうなづき合ったとき、ストレッチャーが動き出した。

松永は無言のまま廊下を、ストレッチャーに従うようにして歩いた。
高橋は目を閉じている。
その相好には、自らがもっとも信頼をよせる友の見守るなかで、いま望み得る最高の手術スタッフによって行われる、これから数時間の運命の場に身をゆだねることへの、きっぱりとした覚悟の色がみられた。

2

午前九時四十分。
高橋信次の手術が、予定より十分遅れで始まろうとしていた。
明るい無影燈のもと、高橋にはすでに麻酔が施してあり、まったく意識はない。昏々と、眠っているようだ。
緑色の手術衣を身にまとった医師たちが、緊張の面持ちで手術台をかこみ、同色の手術衣の看護婦たちも、息を詰めて執刀開始の刻を待っている。
「メス」
おちついた声がひびく。